

Ⅳ期膵癌に対し温熱化学放射線治療に連日高気圧酸素治療を併用した 2 例

社会医療法人 共愛会 戸畑共立病院 放射線科 森岡文明

共同演者

放射線科 鞆田義士、成定宏之、今田肇

臨床工学科 樋口優子、垣下ひかる、川崎玲、大田真

【はじめに】

今回、Ⅳb 期膵癌に対して温熱化学放射線療法に連日の高気圧酸素治療を施行した集学的治療により生命予後に寄与できたと考えられる 2 例を経験したので報告する。

【症例 1】

64 歳女性。2012 年 7 月に吐血に対する精査にて胃への直接浸潤を伴う進行膵癌と診断され 8 月より温熱化学放射線治療（GEM）に高気圧酸素治療を開始。2013 年 2 月、肝転移出現した為、放射線治療施行後、肝動注療法施行し、5 月には腹部リンパ節転移に対し放射線治療施行。12 月、転移性肝腫瘍は縮小するも原発巣増大を認めた為、温熱化学療法（FOLFIRINOX）を施行し、以後は対症療法。2014 年 4 月、肺炎の増悪により永眠（1 年 8 か月生存）

【症例 2】

71 歳女性。2012 年 9 月に膵尾部癌、後腹膜リンパ節転移と診断し GEM 投与し 11 月より当院にて集学的治療開始。その後、2013 年 8 月に左鎖骨上窩、後腹膜、骨盤、2014 年 1 月には左頸部リンパ節、外腸骨への多発リンパ節転移に対し温熱化学放射線治療（FOLFIRINOX）を施行。2014 年 3 月まで治療継続したが、全身状態悪化し 2014 年 4 月に永眠（生存期間 1 年 7 か月）

【考察】

症例 1 では肝転移に対し温熱化学療法で制御できたが、再燃時に動注、放射線治療、その後の化学療法の変更を加え、長期にわたり温熱化学療法を継続したことが長期生存に繋がったと考えられる。

症例 2 においても腫瘍マーカーの上昇にあわせて適宜レジメンを変更し温熱化学療法を継続して施行した事が長期生存に寄与できたと考えられる。

2008 年以降に当院で加療したⅣb 期膵癌 14 例を解析した結果では、リンパ節転移の群の中間生存期間は 19 か月で、臓器転移群（8.1 ヶ月）、癌性腹膜炎群（5.7 ヶ月）より優位に良好な結果であった。

Ⅳb 期膵癌でも、局所制御が予後を左右すると考えられる場合は、積極的に放射線治療を使用し、鍵となる病巣を制御する事が、その後の維持治療の成果にも影響すると考えられる。

【結語】

IV期膵癌に対して温熱化学放射線治療に連日の高気圧酸素治療を施行した集学的治療により生命予後に寄与できたと考えられる2例を経験したので報告した。